# しろね図書館だより

発行 新潟市立白根図書館
No.78 平成18年11月1日

✿ 今月の展示架テーマ 「ちょっとくつろいでみませんか？」

もうすっかり里にも秋の香りが漂ってきました。
田んぼの稲はすべて刈り取られ寂しい感じがしますが、その分木々たちががんばって彩りを添えようと赤く燃えるように色づいています。葉を落とす前の最後のひと仕事をしているようです。
紅葉や落葉のメカニズムは、ぜひ図書館で本を借りて見て下さい。
目にも心にも栄養を与えましょう。

## 10月の

| | |
|---|---|
| 来館者 | 15,958 人 |
| 貸出冊数 | 14,376 冊 |
| 予約件数 | 242 件 |
| ブックバス利用者 | 527 人 |
| ブックバス貸出冊数 | 1,199 冊 |

視察見学 165人含

リクエスト情報（しばらくお待ち下さい）

1位 東京タワー
ハリーポッターと謎のプリンス 上・下（12名）
3位 名もなき毒（11名）
4位 赤い指
陰日向に咲く（8名）
6位 容疑者Xの献身（3名）

## 戦うネイチャーフォトグラファー

しろね図書館では、2007年1月14日(日)に文化講演会を開催します。
講師には、市内在住の自然写真家・天野 尚（あまの たかし）さんをお招きします。
今号より数回にわたり、天野さんがどんな人か紹介していきます。

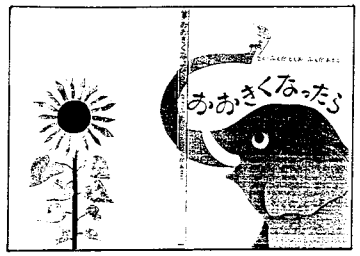
## 天野尚講演会のお知らせ

天野尚さんは、1954年新潟県西蒲原郡巻町（現新潟市）生まれ。
アマゾンやアフリカなどの熱帯雨林を探検して、自然の風景を撮影する写真家です。熱帯の自然を写真にとどめるだけでなく、これらの自然から着想を得たイメージを、ガラスの中の水中世界に表現する芸術家でもあります。
宝石の原石のような熱帯魚が登み渡った水中にたわむれ、緑鮮やかな水草がきらめく光合成の気泡をまとう——水槽の中に自然の生態系を切り取ったかのような美の世界——それが「ネイチャーアクアリウム」と呼ばれる天野さんの芸術なのです。その活動は海外でも高く評価されており、豊富な自然体験をもとにした講演活動を、日本国内はもとよりドイツ、イタリア、アメリカなど世界各国で行っています。

（次号につづきます！）

## 子どもたちといっしょに「おおきくなったら」

ふくだとしお・ふくだあきこ さく
（幻冬舎）




絵からも文章からもやさしさが伝わってくる絵本です。
「おおきくなったら、何になる？」と子どもに問いかけたことありますよね。そのとき、どんな答えが返ってきましたか。また、みなさんはどんな答えをしていましたか。
子どもが成長する姿を見るのは楽しいと思います。色々な夢や希望がそこにはつまっているから。夢や希望を持てるのは私たち人間だけ。本の中のように、ひよこはおおきくなったらにわとりにしかなれない。おたまじゃくしもおおきくなってもかえるにしかなれない。確かに私たちもこどもからおとなにしかなれませんが、私たちはそこにたくさんの夢や希望を見ます。動物たちと違って自分のなりたいおとなになることができるのです。
おとなになるとこどもの頃に持っていた何かを忘れてしまうのかもしれませんが、今、こどもと一緒に自分にも問いかけてみて下さい。

第73回読書会 「星々の舟」 （しろね図書館友の会 しろね図書館 共催）
村山 由佳 著 （文藝春秋）
第129回 直木賞受賞作品。
4人兄妹の許されざる恋の顛末、そしてそれぞれの想い。父の戦争の傷跡。切なくも悲しい「家族」のストーリー。

## 11月の行事 ブックバス

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 (水) | 絵本のじかん 3:00～ | 新飯田小<br>茨曽根小 | 12:35～13:20<br>13:35～14:35 | 16 (木) | | 白南中<br>左潟地C<br>左潟小 | 12:55～13:35<br>14:00～14:40<br>15:00～15:45 |
| 2 (木) | | 白南中<br>左潟地C<br>左潟小 | 12:55～13:35<br>14:00～14:40<br>15:00～15:45 | 17 (金) | | 白井小<br>白井中 | 12:55～13:35<br>14:00～15:45 |
| 4 (土) | おはなし会 3:00～ | 大通地C<br>根岸農公 | 14:30～15:00<br>15:30～16:00 | 18 (土) | おはなし会 3:00～ | 大通地C<br>根岸農公 | 14:30～15:00<br>15:30～16:00 |
| 5 (日) | 第8回おはなし講習会(1) | | | 19 (日) | 第73回読書会 2:00～ | | |
| 8 (水) | 第42回 あかちゃんがはじめてであうほん<br>絵本のじかん 3:00～ | 根岸小<br>大鷲小 | 10:00～10:20<br>12:30～12:50 | 22 (水) | 絵本のじかん 3:00～ | 大鷲小<br>根岸小 | 12:30～12:50<br>13:10～13:50 |
| 9 (木) | | 白根北中 | 13:10～14:00 | 24 (金) | | 小林小<br>白根小 | 10:10～10:40<br>13:00～13:50 |
| 10 (金) | | 小林小<br>白根小 | 10:10～10:40<br>13:00～13:50 | 25 (土) | おはなしかご例会 10:00～<br>おはなし会 3:00～ | 新飯田農公<br>戸石公 | 14:30～15:00<br>15:30～16:00 |
| 11 (土) | おはなしかご例会 10:00～<br>おはなし会 3:00～ | 新飯田農公<br>戸石公 | 14:30～15:00<br>15:30～16:00 | 26 (日) | 第8回おはなし講習会(2) | | |
| 15 (水) | 絵本のじかん 3:00～ | 新飯田小<br>茨曽根小 | 12:35～13:20<br>13:35～14:35 | 29 (水) | 絵本のじかん 3:00～ | 新飯田小<br>茨曽根小 | 12:35～13:20<br>13:35～14:35 |

## 第72回読書会

平成18年10月15日（日）
午後2時から　参加者4名

『海と毒薬』

遠藤周作　著

△参加者の感想▽

■実際にあった事件をもとにして書かれてはいても、すべて作者が作り上げた内容、人物像とは思えないほど人間の深層が書かれていたと思う。
■心理描写がすばらしく、人間の揺れ動く気持ちがありのままに書かれていた。
■人を殺めて普通に暮らしていけるのだろうか。自分自身の何かが壊れたまま生きていくのかもしれない。
■解剖の場面は、人間は〝物〟であり、命あるものとして感じられなかった。
■どんなものにも進歩するにはこうしたわりきれないものがあるのだろうか。いずれかを選択しなければならない時何を計って選択するのだろうか。
■私なら・・・と思ってもわからない。
■人間の良心はどこに？と問いかけながら読んでいた。
■戸田の少年時代の様子を読んでみると作者自身ではないかと思えた。きっと自身を多少なりとも映し出しているのではと思った。
■人物の内面のひどく醜い面ばかりが書かれていて読んでいると人間が怖くなった。
■手術の様子よりも行う人間、その内面の様子が一番恐ろしく感じた。
■この作品を通して、今起こっている様々な事件と重ねて考えていた。
■どんなに反省しても、罪の重さにさいなまれても人は繰り返し罪を犯してしまう。犯罪は増え続けていくばかりだし、良心にどれだけ悔いたら変わるのか。
■医療現場という特異の環境もあったのかもしれないが、心が痛かった。
■戦争というたくさんの死と向き合うなかで人間は苦しみ、遂には罪の意識や良心の存在すら見失いどこかに、誰かにその責任があると思ってしまう。すべては、些細な要因で起こりうること人間の私利私欲によって形こそは変わっても日常にその危機はあるのである。

（大野恵子）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

### 次回の読書会は

『星々の舟』

村山由佳著

読書会とは、同じ本を読んでお互いに感じたこと、思ったことを好きなように話合う会です。希望される方は、貸出しますのでカウンターでお申し出ください。みなさんのご参加お待ちしております。

☆☆☆★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～　図書館員がおすすめするこの１冊　～

# 「ハラスのいた日々」

中野孝次作（文藝春秋）
一般　９１４．６ナ

私がこの本に出会ったのは、嫁いだ娘からの小包の中に一冊の本が入っていたからです。

我が家の愛犬（雑種）は、娘が６年前に、生まれたばかりの子犬を親戚からもらってきたものです。

それ以来、すっかり私の朝・夕のパートナーとなっており、家族の一員になっています。

そんな我が家の姿や私の行動を見て、娘が「親父にぴったりの本」があると思って、こっそりとプレゼントをしたと思います。

はじめは、どこにでもある単なる犬の物語だろうと思って、興味もなく机の上に置きっ放しにしておきましたが、ある日ある時、暇つぶしに丁度良いと思い、手にとって読みはじめてみると、これがまるで違って我が家のこと、私と我愛犬！との関係が語られているようで、一気にのめりこんでいってしまいました。

物語は、中年の老夫婦と犬のハラスとの出会いからはじまって、犬を飼っている家ならどこにでも見受けられる日常の些細な出来事やスキー場での失踪事件、そして最後は悲しい別れを迎えるまでの、家族として暮らした１３年間の犬とのふれあいが事細かに描かれており、随所に老夫婦の犬に対しての愛情が感じられます。

この本を読み終え、これといった芸ができるわけでもない我愛犬ではありますが、不思議と益々愛おしくなってきました。

犬を飼っていない人も、犬好きでない人も十分楽しめ、感動できる一冊です。

（館長　坂井治一）